

ベルクソンと社会化した形而上学

山 田 秀 敏

(序)

ベルクソン哲学は時間と空間の二元論であるといわれている。しかし、このことは時間と空間が対等な立場で両立しているということの意味しない。『意識に直接与えられたものについての試論』(以下『試論』と略記する)を除けば、常に時間の方が優位に立っている。哲学的アポリアを提示するのは常に空間の側なのであって、ベルクソンはそれを時間的思考を導入することによって解決しているのである。

しかし、ベルクソン哲学が二元論を形成し、そして結局は時間と空間の混合によって現実世界を説明しているからといって、時間と空間の純粹性が損なわれているわけではない。純粹性とは、ベルクソン哲学の場合、そこに到達するためには一気に飛躍を行なわなければならないということの意味している。直観とはそういうものである。分析的努力は、それがいかに努力を強いるからといって、ちょうど不動性をいくら加算しても運動のものには到達しないのと同じように、実在には到達しないのである。

このことは純粹記憶すなわち過去についても同様である。ベルクソンによれば、イギリス経験論における過去は現在の活動性が弱められたものにすぎない。しかし現在の活動性をいくら弱めていっても、それは弱められた現在にすぎず、現在を希薄化したからといって過去になるわけではない。知覚をいくら弱めても記憶にはならないのである。純粹記憶の何たるかを知るためには一気にそこに向かわなければならない。

さらに「開かれたもの」についても同断であって、「閉じられたもの」をいくら拡大しても開かれたものには到達できないのである。閉じられたものである家族愛や愛国心をいくら拡大しても開かれたものである人類愛に

至ることは出来ない。したがって、ベルクソン哲学は常に一気にそこへ向かうという、いわば一つの回心 (conversion) を要求しているのであって⁽¹⁾、それがベルクソンの哲学的態度であったのである。

さて、空間的な思考と行動とが現実化した社会生活のことを、すなわち時間性と空間性とが混合した社会生活のことを、社会化した形而上学と呼ぶことにすれば、こうしたベルクソンの回心は社会化した形而上学に対しいかなる姿勢を見せたのであろうか。それを比較的初期⁽²⁾のベルクソン哲学のうちで描写することが拙論の目的である。

(一)

ベルクソンによれば「全く純粋な持続とは自我が生きることに身をまかせ、現在の状態とそれに先行する諸状態との間に境界を設けることを差し控える場合に意識の諸状態がとる形態である」(D. I., pp. 74-75)。「要するに純粋持続とは、質的変化の継起以外のものであり得ぬはずだし、それらの変化ははっきりした輪郭を持たず、お互いに対して外在化する傾向も持たず、数との間にいかなる血縁も持たずに、融合しあい浸透し合っている。それは純粋な異質性であろう」(p. 77)。このように持続とは相互浸透的連続の質的多様性のことであり、そこには進展しかない。「絶えず形成途上にあるということこそ、われわれの意識に映ずるがままの持続と運動の本質そのものに属する」(p. 89) からである。

この持続に対立するものとしてベルクソンが『試論』で取り上げたものが空間、正確に言えばそこで幾何学そのものが成立しているような観念的等質空間である。この観念的等質空間はベルクソンによれば同時性の体系である。というのは空間は時間的規定を受けないとされたから、ある与えられた瞬間 t における物体間の位置関係があるばかりだからである。ベルクソンは次のように述べる。「したがって、このような場合問題になっているのは持続ではなくて、単に空間と同時性である。現象がある時間 t の終わりに起こるだろうと予告することは、意識が今からその時までのある種の同時性を t という数だけ記しとどめるということである。今からその時までという言葉に錯覚を起こしてはならない。なぜなら持続の間隔とはわ

れわれにとってだけ存在するものであり、またその原因はわれわれの意識の相互浸透に他ならないのだから。われわれの外に見いだされるのはただ空間したがって同時性ばかりであり、同時性については、継起はすべて現在と過去と比較によって考えられるものである以上、それが客観的に見て継起であるということさえ出来ないのである」(p. 86)。

空間的であるとは無時間的であるということであり、物体間の位置関係しか存在していないということである。われわれが空間の第四次元として導入している時間 t は、いわば映画フィルムの一コマなのであり、コマを送るたびに別の位置関係があらわれるというわけである。したがって、空間性とは内包物の見かけの継起にもかかわらず本質的には不動性である。

ベルクソンは「厳密に言えば、意識によって知覚される内的持続は、意識事象相互の入り組み合いや、自我の漸次的な豊饒化と合致することが認められるだろう」(p. 80)と述べているが、われわれが時計で計る時間は時間としてのその独特な力を持たないのである。時計時間は空間と同じく不動的である。「そうになってしまうと、時間なるものを、われわれ自身の時間をさえも、利得あるいは損失の原因として、具体的実在として、独特の力として、考えるようなことは不条理になってしまうであろう」(pp. 116-117)。時計時間により「生きていて意識を持っている存在の、お互いに豊かになっていく諸瞬間」(p. 173)の無化が行なわれるのである。つまり、ベルクソン哲学において疎外とは時間が無用にされた生活のことなのである。

このことはベルクソンが持続を「深い自我」と関連させるとき、一層はっきりとしてくるであろう。ここでのベルクソンの論敵は連合心理学(l'associationalisme)である。

純粹持続は深い自我を形成する。「内的自我すなわち感じたり情熱を燃やしたりする自我、考えこんだり決心したりする自我は、その諸状態と変容とが緊密に浸透しあっているひとつの力であって、それらの状態や変容を切り離して空間内にくりひろげようとすれば、ただちに深い変質をこうむってしまうものなのだ」(p. 93)。深い自我は空間的規定すなわち観念的等質空間の中での心的諸要素の並置を受けないものなのであるが、これと全く反対の主張をしているのが連合心理学なのである。「やがては抽象に

達するはずの、観念を構成する諸要素のあのような分解はきわめて便利なので、われわれは日常生活においても、また哲学上の議論においてさえも、それなしにすませるわけにはいかない。けれども分解された諸要素とはまさしく具体的なその観念の構造に中に入りこんでいた諸要素なのだと考えたり、現実の諸項の相互浸透にそれらの諸項を示す記号の並置を代置しながら、持続を空間によって再構成していると主張したりすれば、われわれはどうしても連合心理学の誤りに落ち込んでしまう」(p. 100)。

連合心理学の思考方法は持続する意識を諸要素に分解し、それらを観念的等質空間のなかに並置することによってさまざまな心的現象を説明しようとするところにある。連合心理学はアトミズムなのである。連合心理学は、その意図はともあれ、人間の精神をあたかもそこからあらゆる感情や感覚や観念などをボールのように任意に取り出すことのできる袋のごときものとみなしている。この意味で連合心理学は社会生活にまことに適応した心理学と言うべきである。なぜなら、社会生活のためには、時計時間にあわせて社会の要求に正確に対応できるボールを取り出すことが要求とされるであろうからである。さらに、一方からすれば、偶然に取り出されたボールがその人のその場の人格であるということになろうし、他方からすれば、実際任意に選ばれたどんなふたつのボールの間にも十分に遠ざければ何等かの連合が必ず見つかるであろう。したがって連合心理学においては時間は無用の存在にされているのであるが「しかし時間の間隔を縮小することは、そこに継起する意識の諸状態を空虚にしたり、貧困なものにしたりすることではなくて何だろうか」(p. 148)。

このようにして「自我の影」が生まれる。このプラトンの影という言葉は「表層的自我」をあらわすためにベルクソンがしばしば用いた表現である (e. g., p. 99, p. 124, p. 174, p. 175)。「しかしたいていの場合われわれは前者すなわち等質的空間内に投影された自我の影に満足している。意識は区別しようとする飽くことのない願いにさいなまれて現実を記号で置き換えあるいは記号を通じてしか現実を知覚しない。このように屈折せられて、まさにそのために細分されてしまった自我は、一般の社会生活や特に言語の要求にはるかによく応ずるものになるので、意識はこのような自我のほうが好ましいと思い、次第に根本的自我を見失っていくのであ

る」(pp. 95-96)。ここでは「細分された自我」という表現に注目すべきだろう。持続的な存在の豊かさというものは、むしろふり捨てたほうがいい重荷にすぎないのだ。

これらの事柄は決定論についてベルクソンが示した解法についても成立する。私がふたつの可能な行動 X と Y との間でためらっていて (p. 133. fig.), そのどちらかを結局は選択してしまったとする時、自由論者はためらったということは他方を選び得たということだと言い、決定論者は結局一方に決めたのだから決定されていたのだ、と言う。しかし、ベルクソンによれば、この問題の構図そのものが誤っているのである。なぜなら、X も Y も共に既に開かれてしまった可能性、結局は行動の終点に身を置いて回顧的に眺められた可能性にすぎないからである。自由とはそのようなものではない。自由とは既に開かれた X か Y かの選択にあるのではなく、まだ開かれていない第三項を探しだそうとすることなのである。自由行為は常に新しいものを生み出すはずであり、そうでなかったならそれは自由ではない。

常に空間的な量的規定を受けた上でなければ問題が提出されないこと、これがベルクソンによれば最大の問題なのである。そして、この構図が実は西洋近世哲学全般に共通する前提になっていることこそが、まさに『試論』でベルクソンが批判しようとしたことなのである。「デカルトの自然学やスピノザの形而上学や現代の科学理論を探求してみるがいい。すると、いたるところに、原因と結果との間に論理的な必然性の関係を確立しようとする同じ先入観が見いだされるであろうし、またこの先入観は継起の関係を内属の関係に変形し、持続の作用を無に帰し、外見上の因果性を根本的な同一性によって置き換えようとする傾向によってあらわされることがわかるだろう」(pp. 156-157)。継起を内属に、因果性を同一性に、つまりは時間を空間に代置するということ、そのようにして無時間的な世界を創出し、次にそれを諸要素へと細分化し、その後にもう一度再構成していくこと、これこそがベルクソンの観点からすれば従来の形而上学のやり口なのである。時間性を無化された表層的自我の発生と近世哲学と近代科学の発生とは深い論理的血縁を持つということなのである。近世哲学と近代科学と連合心理学は空間的可分性という同じ根拠と論理を持ち、それによ

て媒介されているのである。

(二)

『試論』的二元論における意識と空間（観念的等質空間）は相互否定的対立として扱われていたのであるが、『物質と記憶』においては意識と空間（具体的延長）とはもはや対立してはいないということが第二節での要点になる。

ベルクソンは『試論』の問題意識を引き継いで『物質と記憶』において旧来の哲学体系の批判をさらに徹底していく。『試論』ではほとんど言及されていなかった持続の空間的なものへの浸入が『物質と記憶』の課題になる。本節では「表象」の問題と「記憶の現実化」の問題をとりあげよう。

最初に表象について⁽³⁾。例えば赤いりんごが見えているとした時、私にはそれが赤く見えていることは確実であるにしても、りんごが実際にその赤さを持っているかどうかを「私には赤く見えている」という事実からだけでは確認することはできない。そこで表象が物質に的中しているかどうか問題になるわけであるが、しかし表象は意識的なものであり意識は拡がりを持たないとされるから、拡がりを持たぬものがどうして結局は拡がりを持つに至るのかという難問が生じることになる。そこで、触覚が拡がりを知覚するのであるとか、延長を持った物質がわれわれの知覚世界の外に存在しているのだとか言われることになるであろう。「だから観念論と実在論がここで異なっているのは、前者が延長を触覚的知覚にまで後退させるので、延長はもっぱら触覚的知覚の特性になるのに対して、後者は延長をさらに押しやって、あらゆる知覚の外に出してしまう点だ」(M. M., p. 240) ということになる。

後者の実在論が維持できない立場であることは言うまでもないであろう。われわれの外に基体となる物質的延長を仮定したとしても、それは仮定上われわれの知覚から離れた存在であるわけだから、その存在を要請することしか出来ないのである。前者の観念論においても事情はそれ程変わらないのであり、仮に触覚に延長的特性が認められるとしたところで、触覚がなぜに感覚的延長を感じるのかという問題が生じるだけのことであ

り、難問が一步退いたにすぎないのである。「一方ではこの抽象と、他方では感覚との間に、もはや可能な交通が見いだされないにしても、怪しむべきことであろうか」(p. 243)。

これら二つの立場に共通していることは、観念論者と実在論者との期待に反して、表象は空間との関連を立てることができないということである。「この表象は空間の外へと追放され、はじめの出発点であった物質と、もはや何一つ共通点を持たぬことにされる」(p. 37) のである。「しかし眞実は、空間はわたしたちの中にないと同様に、わたしたちの外にあるのでもなく、ある特権的な感覚の集合に属しているわけでもない」(p. 243)。むしろすべての感覚が感覚そのものにおいて拡がりを持つというべきなのである。ベルクソンの言いたいことは、表象は実は空間的ではありませんということなのである。換言すれば、従来の哲学体系は空間的なものを考えることにおいてすら不十分な体系であったということである。では、もともと空間的であったはずの哲学が、なぜ空間を考えることにおいてさえ不十分であったのか。それはそこで考えられていた空間が実は観念的等質空間すなわち「ただ一つの瞬間しかなく、すべてが常に新規まきなおしになる抽象的空間」(p. 245) でしかなかったからに他ならない。ところがわれわれの知っている具体的空間は感覺的諸性質と現実的運動で充滿しているのである。「このように理解すると、空間とはまさに固定性と無限可分性の記号なのである。具体的延長すなわち感覺的諸性質の多様がその中にあるのではない。わたしたちがこの多様の中におき入れるものこそが空間なのだ。空間は現実的運動が身を託す支柱ではない。反対に現実的運動こそが、自分の下に空間を沈澱させるのである」(p. 244)。ベルクソンは観念的等質空間と感覺的質的多様に満ちた具体的延長を区別する。等質的空間はそこで現実的運動が行なわれる実際の空間でないこと、「表現の便宜と物質的生活の必要」(ibid.) によって具体的延長から等質的空間が構想されることを右の引用は示している。『試論』で既に示されていたように、ここでもやはり観念的等質空間の存在理由は可分性と功利性である。

ベルクソンは以下のように主張している。「ふつう事実と呼ばれているものは、直接的直観に現われるままの現実ではなく、現実的なものが実践上の関心と社会生活の要求に順応した姿である。純粹な直観は外的である

うが内的であろうが、分割不可能な連続のそれである。わたしたちはこれを並列的諸要素に区分するのであり……」(pp. 203-204)「こうした現実の細分化は、まさしく実生活の必要のために行なわれたのであるから……」(p. 204)。例えば、イギリス経験論における経験とは「ばらばらに解体され、それ故おそらく変質させられて、いつも行動と言語をなるべく容易にするように配列された」(*ibid.*) 経験にすぎないし「カントが証明したような思弁的理性の無力は、根本的にはおそらく、身体的生活のある必要に隷属して、わたしたちの欲求を充たすために分解する必要のあった物質に、働きかける知性の無力に他なるまい」(p. 205)とベルクソンは述べる。

ベルクソンは功利性を生活のためにする実在の分割に見ているのであるが、「こうした欲求が作り出したものを破壊するならば、わたしたちは直観のその最初の純粹さを回復し現実との接触を取り戻すであろう」(p. 205)と述べてもいる。その破壊の作業のためには「激しく例外的な努力」(p. 209)が必要とされるのであるが、それが成功するならば「直接的認識はそれ自身のうちに正当な根拠と証明を見いだす」(*ibid.*) のである。分解は観念的等質空間を根拠とする作用であるが、そこを離れたからといって具体的空間から離れたことにはならない。したがって、「ある程度まで延長を去ることなく空間から離れることが出来るわけであり、この点にこそ直接的なものへの復帰があるだろう」(p. 208)と言い得る。具体的空間と意識とは『試論』的な相互否定的対立のなかにあるのではなく、それらはそもそも対立していないとベルクソンは主張しているのである。「直接的な実在とじかに面接してみよう。わたしたちはもはや知覚と知覚される事物、質と運動との間に、越えがたい距離も本質的な差異も見いださなければ、本当の区別を見いだすこともない」(p. 245)。

次に記憶の現実化の問題に移ろう。意識と具体的拡がりがある『試論』におけるような相互否定的対立にあるものではないということが確立されれば、そこに意識から空間への通路が開いたことになる。記憶の現実化とは、この通路における現実的な交通の有様のことである。ここでは以下の二つの点を確認することに止めたい。その第一点はすべての記憶が現在の平面に潜在的にはあれ、やってきているということ、第二点は身体は記憶を

喚起する装置であると共にそれを阻害する装置でもあること、この二点である。

ベルクソンの記憶論を解釈するにあたって、もっとも重要なことの一つは、現在が出来た後になってやっと過去が出来るという常識的な思考に陥るべきではないということである。このような思考方法は「今・今・今」の今一系列的時間を前提としているが、持続がそのようなものでないことは明らかである。過去は古くなった今ではない。過去は現在から活動性を引算したものではなく、逆に現在が過去に対して内在的あるいは不可分的なのである⁽⁴⁾。現在が通りすぎていくのではなく、過去がそれ自身の運動によって現在を現在たらしめているのだ。今一系列的時間は回顧的時間であり時間の方向がベルクソンの時間とは反対なのである。「本当は記憶力は現在から過去への後退のなかにあるのでは全くなく、反対に過去から現在への進展の中にあるのである」(p. 269)。

過去が古くなった現在であると誤って確信されてしまうのは、過去の一つ一つの出来事を変更することは出来ないと感じられているからであろう。しかしながら、そのことが正しいとしても、過去の全体がもはや動かないものである、すなわちベルクソンの意味で時間的生成が認められないということにはならない。

同様に、記憶も知覚が出来てからやっと記憶になるというものではない。確かに、一度経験したことでなくてはそれが記憶になることはないであろう。しかしながら、記憶の全体が問題になるときは事情が異なるのである。ベルクソンにとって、全体としての記憶はきわめて活発なものであって、それは個々の記憶内容が不動的に表象されることと矛盾しないのである。「記憶の全体の無数の可能的反復を想定するならばわたしたちの過ぎ去った生活の写しは、一つ一つそれなりに切断されて特定の断面を呈するであろうし、ある写しから別の写しに移ると断面は同じではないであろう」(p. 190)。記憶は無数に反復するものであり、現在の平面に全部与えられており収縮と膨張の運動を持つものである。「第二の仮説(ベルクソンの仮説……筆者註)では、心理的諸事実の連帯が確認されるだけのことであり、それらは反省のみがばらばらな断片に分かつ未分の全体として、いつも直接意識に全部与えられている。この場合、説明すべき事はもはや

内的状態の凝集ではなく、意識がその内容の展開を引き締めたり広げたりする収縮と拡張の二重運動である」(p. 185)。

しかしわれわれは常にすべての記憶を想起しているわけではなく、ある限られた範囲の記憶を想起しているのである。これに対するベルクソンの答えは周知のように運動図式であり、運動図式によってさしあたり要求される行動のために必要な記憶が限定的に想起されるのである。「習慣が組織した感覚=運動系の総体からなる身体の記憶力は、ほとんど瞬間的な記憶力なのだけれども、過去の本当の記憶力がその基盤をつとめている。両者はばらばらな二つのものではなく、第一のものは既に述べたように、第二のものによって経験の動く平面に差し込まれる動的先端に他ならないから、このふたつの機能が互いに支持を与えあうのは当然である。実際、一方では、過去の記憶力は感覚=運動的諸機能に対し、それらを導いて任務につかせ、運動的反応を経験の教示する方向におもむかせ得るすべての記憶を呈示する」(p. 169)。

(三)

ここでわれわれが目したいのは『笑い』である。というのは、『笑い』は『試論』や『物質と記憶』の実際生活への応用だからであり、そこで持続の具体的生活へのあらわれ方の一部が語られているからである。

ベルクソンによれば笑いとは「生きたものにかぶせられた機械的なもの」(R., p. 29) に対する社会的制裁である。時間的なものである生きたものと、空間的なものである機械が「かぶせられた」(plaqué) という形式の下にはあるが、一時的に接触するのである。

生きたものはこっけいでなく、機械もこっけいではない。こっけいなのは、生きているものであるはずなのに機械的にふるまうことである。「系列の干渉があるにせよ、ひっくり返しや繰り返しがあつては、目的は常に同じであり、われわれが生の機械化と呼んだものであることがわかる。……現実の生は、それが自然にこの種の効果を生じる程度に比例して、したがって現実の生が自分自身を忘れる程度に比例して、ヴォードヴィルなのだ。なぜなら、生が絶えず注意していれば、生は変化にとんだ継続であ

り、逆にすることの出来ない進行であり、分割できない統一であるから」(p. 77)。そして、笑うためには笑われている当人に対して「私の心情を動かしてはならない」(p. 106)。われわれは笑うためには相手に共感してはならないのである。共感や憐憫（これらは持続的なものである）を働かしたら、私はもはや笑うことは出来ないのである。

このように、ベルクソンの笑いは時間と空間の区分をここでも用いるならば、一見したところ実に空間的であることがわかるだろう。われわれは共感してはならないし、相手のなかに生にかぶさった機械を見なければならぬ。しかももっと注意すべき事は、生の機械化を笑うためには、笑っている者もある程度までの機械化を受け入れざるを得ないということである。ベルクソンは『笑い』のなかで、びっくり箱で遊ぶ子供の例をあげている(p. 53)が、その遊びを楽しむためには、子供も機械的行動をとらざるを得ないのである。機械で遊ぶためには、自分のほうもある程度の機械性を受け入れる必要がある。

しかしながら、笑いはやはり生の潜在的確認なのである。われわれが生きたものにかぶせられた機械的なものを笑うとすれば、生きたものの何たるかが潜在的には分かっているなければならない。笑われているものは機械的生であり、笑い自体も習慣的ですからあるが、それらを根本から支えているものは持続である。

われわれがベルクソンの記憶論で確認したことは、現実化される記憶はなるほど記憶の一部であるが、しかし潜在的レベルにおいてはすべての記憶が既にやっけてきているということであった。持続は社会生活のためにある程度まで自分を犠牲にせざるを得ないが、潜在的レベルにおいては持続は充満の豊かさを持ったままであるということである。笑いの場合においても、実際に確認されるものは、役者の運動および台詞の再認と、劇中の役者の運動によって模倣としての運動図式が観劇している者に作動しているということだけである。ところがその運動図式は役者の運動そのものによって止められる（止められなければ、それはむしろ優美の運動になるであろう）。持続がいわば一瞬だけ無理に停止させられるのである。ここでは持続の存在はわれわれの意識に上らないのであるが、まさに現実化しようとして果たせなかった潜在的存在としての持続が顔を出そうとするのであ

る。いわば持続がわれわれをくすぐりに来るのである。

事物を分割する知性は事物にはり付けられたラベルしか見ない。「たいの場合、われわれは事物に張りつけてある札を読むにとどまっている」(p. 117)。ベルクソンが批判する言語とは、このようなラベルとしての言語、意味と事物とが一対一対応しているかのように信じられてしまった言語であり、それが本来持っている言語そのものの過剰分についてではない。この過剰分については「われわれは言語のなかに何かわれわれの生を生きているものを感じとる」(p. 99)。言語の持つ過剰分についてと同様のことが笑いについても言われ得るであろう。言語が単なるラベルになり社会生活の役に立つように、笑いも社会生活のためにあるものであって場合によっては抑圧的ですからある。「笑いは正義に絶対的にかなったものではありえない」(p. 151) のであり、しかも「他者の人格をあやつり人形とみなそうとする」(*ibid.*) のである。しかしながら、言語がその過剰分を自らの生命力としているように、笑いもまた精神の流動的状态を表しているのであって、それは潜在的なものと顕在的なもの間で流動する精神の相互作用なのである。笑いとは機械化された生の周りをぼんやりと取り巻く生の過剰分、真なる生の遠くからの反響なのである。

(四)

空間性とは分割再構成することであった。そしてそれを空間的思考方法と呼ぶならば、ベルクソンによれば空間的思考方法は形而上学で一般に行なわれている事柄なのであるから、従来の形而上学そのものが分割への志向を潜在的に含んでいたのである。ベルクソンの観点からすれば、西洋近世哲学は空間の分割性という点で技術的・操作的思考をはじめから含んでおり、またアトム化⁽⁶⁾への傾向をはじめから含んでいたのだとすることが出来る。そのことは結局われわれが社会化した形而上学の中に住んでいること、具現化した近代哲学を生きていることを意味しているのである。

これに対してベルクソンが提示したものが持続であった。持続は、それを捉えるためには直観が必要とされたように、ある意味でとらえどころのない厄介さを持つものであるが、そこが逆に社会化した形而上学に対する

武器にならなければならないはずである。

現在のわれわれに必要とされている論理はおそらくベルクソンの言う持続そのものではないかもしれないが、しかし、それは何程かは持続に似たものを持っているであろうし、また、ベルクソンの示した問題解決のための方向そのものはわれわれにとって意義深いものがあると言い得るのではないだろうか。

(註)

ベルクソンからの引用は P. U. F. の単行本を用い、ページ数を直接本文に記入した。註および引用を含めて傍点はすべて筆者のものと思われたい。また以下のように略記する。

D. I.……*Essai sur les données immédiates de la conscience*

M. M.……*Matière et mémoire*

R.……*Le rire*

なお、本文中に直接記入した引用はそれぞれ、第一節は D. I., 第二節は M. M., 第三節は R. からの引用である。

- (1) cf., V. Jankelévitch. *Henri Bergson* (P. U. F.), p. 185. ベルクソンも「哲学するとは、思惟の働きの習慣的な方向を逆転する事にある」(*La pensée et le mouvant*, p. 214.) と述べている。
- (2) 初期ベルクソン哲学と述べたが、ベルクソンの思想は転換というものを経験しなかったと思われるので、ベルクソン哲学にそのような区分は本当は無用とすべきなのであろう。ここでは便宜上、『試論』(1888) から『笑い』(1900) までのことであると思われたい。
- (3) 拙論「ベルクソンにおける純粹知覚と直観」(『名古屋大学哲学論集』第二号) を参照されたい。
- (4) cf., M. Čapek *The New Aspects of Time : Its Continuity and Novelty* (Kluwer Academic Publishers, 1991) p. 39.
- (5) これは M・ピカートが『騒音とアトム化の世界』において「人格のアトム化」と述べたものと関連している。
これに関しては、坂田徳男著「私の回想のうちのベルグソン」(『ベルグソン研究』勁草書房) を参照されたい。